

2021年12月14日

コロナ禍を克服し、ほぼ全業種が増益 来期は空運が黒字化も、全体では鈍化

最新決算を踏まえて四季報が全社の業績を独自に予想

3月期決算会社の2022年3月期第2四半期決算が出そろいました。株式会社東洋経済新報社(本社:東京都中央区、代表取締役社長:駒橋憲一)では、業界担当記者が決算発表を受けて取材を行い、全上場会社について独自に今期、来期の業績予想を見直しました。

四季報予想を集計した結果、今期(21年10月期~22年9月期、対象3481社)の予想営業利益は、全産業で営業利益が23.7%増加する見通しとなりました。製造業が前期比50.6%増加。非製造業も、投資評価益が急落するソフトバンクグループが属する情報・通信のマイナスを補い、同2.1%増加となります。

業種別では、建設と電気・ガスが連続減益の予想です。特に原料高が響く電気・ガスの減益率は45.4%と大きくなっています。情報・通信は前期の増益から反落、また空運は連続赤字の見通しです。

一方、前期に赤字転落した陸運は黒字転換します。残り26業種は営業増益の見通しです(銀行業、保険業を除く)。中でも802.7%増と増益率が大きいのは鉄鋼です。前号(2021年秋号)時点の689.9%増見通しから、さらに増益率が拡大しました。出荷数量が復調し、価格も上昇していることが主因です。463.6%増と次に増益率が大きいのは海運業です。ばら積み船や自動車船が好調です。

市場別に見ますと、1部、2部、JASDAQ、新興市場すべてで営業増益となる予想です。前期比では2部とJASDAQが増益に転じます。新興市場は前期に続き高い伸びが続く予想で、通販やネット広告、医療健康情報など幅広い分野でDX(デジタルトランスフォーメーション)化の需要を追い風にした会社が目立ちます。

新型コロナウイルスの変異型「オミクロン株」への懸念が高まっています。一方、これまで幾度も感染拡大の波に見舞われながら、多くの上場企業は好業績を維持してきました。四季報では、来期も全産業の営業利益予想を11.6%の増益としています。ただ増益率は鈍化、業種別でも空運は黒字化の一方、減益が7業種に増える見通しです。

(注)業種別、市場別業績集計の算出方法

『会社四季報 2022年1集』掲載会社で、今期・来期の予想および実績2期分がある企業の業績を集計。実績・予想とも連結決算の数値を優先。ただし、決算期変更企業、連結決算方式変更企業、上場企業の子会社は除く。銀行、保険の営業利益は集計していない

市場別決算業績集計表(前期比増減率)(単位:%)

	決算期	市場別				
		合計 (3481社)	1部 (1984社)	2部 (467社)	JASDAQ (616社)	新興市場 (383社)
売上高	前期(実)	▲6.5	▲6.6	▲7.6	▲3.4	6.0
	今期(予)	8.8	9.0	2.0	5.6	15.0
	来期(予)	3.4	3.3	5.2	6.0	13.5
営業利益	前期(実)	15.4	16.3	▲30.2	▲3.1	104.5
	今期(予)	23.7	23.5	44.5	22.5	73.6
	来期(予)	11.6	11.2	26.2	23.0	63.4
経常利益	前期(実)	5.8	6.1	▲19.8	1.7	146.6
	今期(予)	30.4	30.4	34.8	20.3	87.0
	来期(予)	8.3	8.0	19.8	19.1	62.6
純利益	前期(実)	18.3	18.9	▲36.9	▲3.6	黒字化
	今期(予)	39.8	39.4	91.3	48.2	257.0
	来期(予)	7.2	6.8	24.2	21.1	144.3

(注)新興市場はJQを除く、営業利益は銀行・保険を含まない

本件に関するお問い合わせ先

株式会社東洋経済新報社 総務局広報室：青柳・逸藤、編集局会社四季報編集部：藤尾
TEL：03-3246-5404 FAX：03-3279-0332 email：info@toyokeizai.co.jp